

— 第百拾四号 — (2011年秋号)

秋のミニ市と秋の陶磁器まつり

春の陶器市を初めて工房で開いたのは、1980年（昭和55年）でした。私が小学生の頃、父母が赤絵町今右エ門家の軒先を借りて出展していましたので、市期間中下校時は有田中部小（有田駅近く）から赤絵町まで市見物をしながら回り道をしていました。夕方は、おやじが運転する角ハンドルの三輪自動車に乗って帰っていました。陶器市の賑わいやお客様とのやりとりが面白くて、楽しくてすっかり市に魅せられていました。それから60年。今では秋も開くようになりました。春の市から遅れる事2年。1982年（昭和57年）に、11月1日～3日を秋のミニ市として開きました。特に3日（文化の日）にこだわったのは、売らんかなよりもやきもの文化をお客様に発信してやきものの付加価値を知っていただくとう職人さんの文化祭を開きながら始めました。今年で30回。秋のミニ市（11/1～3）はしん窯独自で。秋の陶磁器まつり（11/19～23）は有田町全体でお迎えする秋の一大イベントに成長しました。今年もワクワクドキドキしながら毎日準備で大忙しです。



秋のミニ市 新作紹介 ※写真奥より

ひょうたん八方押鉢 （径19.2cm×高5.5cm）

ひょうたん小井 （径11.0cm×高7.6cm）

瓜型小皿 （径10.2cm×径7.4cm×高2.4cm）

ひょうたん半月箸置 （径6.7cm×高1.4cm）



えと絵皿（皿立付）

（径 20.0cm×径 12.5cm×高 2.5cm）

秋のミニ市 11月1日（火）～3日（木・祝）8時～17時

●秋の新作展

●陶肌人形展

陶磁器製の四季の陶肌（すはだ）人形を、今回の秋のミニ市にて初めてお披露目いたします。現在12ヶ月の人形達を制作中ですが、今回は11月「やまびこ」、12月「たこあげ」、1月「はねつき」、2月「雪んこ」の4体をお披露目いたします。

●茶房（主催：佐世保玉屋食堂）

●金管アンサンブルミニコンサート 11月1日（火）①12時～、②15時～

●工房案内 期間中毎日 ①11時～、②14時～

秋の有田陶磁器まつり 11月19日（土）～23日（水・祝）8時～17時

●登り窯窯開き 11月19日（土）12時～

（登り窯窯焚き 10月28日（金）18時～10月29日（土）12時）

●ハマペイント体験（無料）

湯呑や飯碗など、焼成中に歪みを防ぐための縁の下の力持ちである「ハマ」。今回こちらのハマに油性マジックで絵付けを無料で楽しんでいただけます。裏面にはしん窯の社是である「器との語らい」「器は人なり」が印刻されてあります。どうぞ旅の記念にお持ち帰り下さい。

●青花スタンプラリー（会場：しん窯、小島芳栄堂岩崎店、陶舗小島札の辻店）

400年事業実行委員会公募小論文提出

5年後の磁器発祥400年を見据えて、有田町に400年事業実行委員会が発足しました。その一般公募がありましたので、手を挙げました。小論文（800字程度）が課題でしたので、日頃思っている事を私なりに提出しました。

以下、その文章です。

「400年事業で私が取り組みたいこと」

有田は磁器発祥の地でもあるが、産業発祥の地でもある。高名な陶芸家を除いて殆どの窯が分業制でなりたっている。特に工と商が共生し輝かしい有田の歴史を作ってきた。ここに来て経済津波のように襲いかかった消費不況を、私たちの知恵と行動で乗り切っていかなければいけない。

工においては職人集団をまとめていく窯やきのおやじの器量に左右する。人のしない事に果敢に挑戦する気概とゆるぎない哲学や理念に支えられている。特に職人さんのやる気を生み出す環境と匠の象徴である認定伝統工芸士を育てる責務がある。

一方商においては、消費が低迷してくると安直に安物志向へ流れていく。有田は文化産業であり癒し産業であるから、より付加価値を高めていかなければいけない。難しい選択を余儀なくされる。付加価値とは窯の細かい工程の紹介であり、高名な作家の成功物語であり、400年の歴史、やきものの様式美など有田自慢をいかに発信できるかである。作り手に認定伝統工芸士の資格があるように売り手にも認定伝統販売士制度を設けたい。そして有田焼カリスマ営業マンとして自他共に認める制度が出来ればと思う。

400年事業は1にも2にも有田焼業界の復興であり、確かな自信と誇りを取り戻す事であろう。販売なくして生産なしと言われる。先ず売る力を強力に推進し、有田の枠にとどまらず県境を越えて5市2町にまたがる肥前窯業圏へ情報を共有する事であろう。今こそ肥前はひとつ運動を展開していかなければ、個々の窯やきと商社では何も生まれないと断言できる。白磁発祥の地有田、産業発祥の地有田の名声は、日本初400年も続いた近世の歴史の一ページにふさわしい国家プロジェクトへ昇格させる事も可能だ。また、全国縦断大有田焼展の復活である。タイトルは、「ふりかえれば未来」とする。400年を契機に全国いや世界に発信しない手はない。

2011年平成23年 7月6日

(有)しん窯 代表取締役社長 梶原 茂弘(67歳)

一般社団法人こどものための柴基金

大河ドラマ「江」で豊臣秀吉の軍師黒田官兵衛役で好演されていた俳優柴俊夫様とその一行4名が有田へ来て下さいました。前号で大震災後、柴さんの友人の里、岩手県田野畑村へ青花の食器の出番があって贈った事に触れていましたが、今回はそのお礼にわざわざ大分経由で駆けつけて下さいました。大分ではこども園光の園のこども達と14kmものウォーキングをして心身共に触れあいのイベントをなされています。その疲れも見せず、4名共元気はつらつと九州横断道路を走破されて来られました。「大分と佐賀200kmは大変だったでしょう。」と言ったら、「オーストラリア1000kmを走破した事もありますよ。」と軽く言われ、そのタフさに驚きました。俳優さんは身体が資本だけに、自己管理は厳しくて脱帽することばかりです。

出来る事で様々な社会貢献をされている生の姿に接し、柴さん一行の生き方は私たちの模範だと痛感致しました。これでお奥様の真野響子さん愛娘の柴本幸ちゃんそれぞれに良いお付き合いができて、柴本家と本当の親戚になったような気持ちになれました。

大親友逝く

金善窯会長金ヶ江喜佐男君（67才）が、9月11日夕方6時頃帰らぬ人となりました。誕生日が1日違いで夏になれば誕生会の話題をどちらからともなく持ちかけていました。実は2006年（平成18年）1月26日に7時間以上に及ぶ大手術から見事に立ち直り、最近では日々快方に向かい、仲間の中心にいて私達同窓生の模範的青年でした。大手術後は自ら180度性格が変わったと言われていましたが、昔から陽気、積極的、前向き、プラス志向は相変わらずでますます元気でした。親友を失うほど辛い事はありません。まだ実感は湧きませんが、彼の意志をつないで職人さんの街有田復興へ全力投球したいと思っています。



1958（昭和33）年8月
撮影当時 有田中学校1年生
（左が喜佐男君、右が私）
かねぜん窯にて